

催眠アプリと白い本 -本屋の店主は凛とした女子生徒を快楽に堕とす-



催眠アプリと白い本 -本屋の店主は凛とした女子生徒を快楽に堕とす-



002

キャラ紹介

主人公 山田店長（おじさん）

個人で本屋を経営しているおじさん。ある時噴き皆男に真っ白の本と紙を渡される。そこで催眠アプリを手にすることになってしまった。月に二度ほど買いに来てくれる女子高生を気にしていて、あわよくば恋人に、それがだめでも身体の関係性を持ってたらと夢を持っている。

ヒロイン なかはら さな 中原佐那

頭が良い人が多いと言われていた学校の三学年。進学を目指し日々勉強している。鋭いつり目に黒髪ショート、オーラからして冷たい印象を周りに与えるが実はとてもやさしい女性。実は家にはエッチなおもちゃを沢山持っている隠れビッチ。

目次

催眠アプリ操作方法	005
強制発情でムラムラオナニー	026
万引き少女の罪は身体で	045
模擬集団プレイ	074
あとがき	106

催眠アプリ操作方法

俺は個人で本屋を営んでいる。

来客も少なく、来るとしても顔見知りばかりのような田舎にある本屋だ。

若者に人気のあるような漫画もほとんど置いてはなく、雑誌や自己啓発本ばかり並べている。

レジの中で椅子に座り、ひっそり自分でも本を読み静かで退屈な時間を過ごす。そんな中にも一つの楽しみがあり、月に二度来てくれる女子学生だ。

凛とした表情に物静かで、氷に例えられるほどの冷たいオーラを纏ったカッコいい女子学生。

今日も来てくれて、毎月買っているファッション誌を買い、最後はこんなおじさんにもありがとうと微笑んでくれる、オーラとは真逆の暖かさを持ち備えている。

そんな彼女は二年とちょっと前から通ってくれているが、年数から見てもあと数カ月でもう来なくなってしまうのだろうか、と思ってしまうと悲しい気持ち顔が覗かせる。

あんな女性と付き合って、セックスして、子ども作って……、そんな事が現実
に起きれば最高なんだが……。

もしくは、あの凛とした女性を犯してハメたらどんな表情で泣くのだろうか……、
案外蕩け顔で受け入れるビッチだったりしてな。

そんな妄想を膨らませている間に、店を閉める時間になっていた。

「さて……：シャッター閉めて掃除するか」

重い腰を上げて、店の出入り口に向かうと黒いコートを羽織った不気味な雰囲気
を漂わせている男の人が立っていた。

「……：なにか見ていくかい？」

個人でやっている分自由も利き、買いたいモノがあるなら別に構わない。

俺も別にレジで座っているだけだ。

その男は表情を動かさずに、鞆から真っ白の表紙に印字も何もない本を取り出し
俺に渡してきた。

「買取かい？ 少しかだけ時間貰う事になるが……」

古本の買取かと思って話を進めると、その男は首を左右に振った。

次は鞆から折りたたまれた紙を渡される。

面倒な客が最後に着ちまった……。

客にはバレないように心の中でため息を吐く。

眉間にしわを寄せながら彼の表情を伺い、その紙を開く。

『お前の理想を叶えるモノだ』

それだけが書かれていた。

「嫌がらせか——……どこ行きやがった……」

顔を上げた時にはその男の姿は何処にもなく、あの不気味な雰囲気が消え去って
いた。

本当に迷惑な客だ。頭を抱えながらシャッターを降ろして店を閉めた。

ひとまず渡された真つ白な本をレジカウンターに置いて店内の掃除をするために、
箒ほうきや埃取りを裏から取り出す。

本の上や隙間の埃を丁寧に掃除して、出入り口から裏の方に向かいながら箒でゴ
ミを集めていく。

そうしているとカード状の何かが落ちていている事に気が付き、拾い上げると学生証

のようだった。

しかもあのよく来てくれる女子学生の顔写真が貼ってあった。

……近くの頭が良い人達ばかりだと有名な学校で……、やっぱり三年生か。

彼女なら取りに来ると思ひ、失くさないように裏に持っていく。

取りに来なくても学校まで届けばいい。

そんな事を考えながら掃除を再開した。

学生証が落ちていたこと以外は普段通りに進み、スムーズに掃除を終えると、裏

でお湯を沸かし紙コップにコーヒーを入れる。

レジカウンターにコーヒーを置き、椅子に座り込む。

大きく息を吐き出し仕事を終えたと全身を脱力させた。

そしてカウンターに置いていた、謎の男が持ってきた真っ白な本が目に入った。

そのまま放置しておくかと悩んだ末に、真っ白でなにも書かれていない表紙に惹

かれ、手を伸ばし中を開く。

最初のページにはQRコードが印刷されており、他のページは真っ白だった。

イタズラのようにしか感じない本だが、QRコードを読み込むだけなら簡単に出

来、無くなるものでもない。

試しにそのコードをスマホで読み取った。

読み込んだスマホには突然真っ白の特徴がないアイコンのアプリが有無も言わさずダウンロードされてしまった。

ウイルスだったか！ と後悔しながらアプリを消そうとするも、そのアプリだけはどうのように操作しても消せはしなかった。

簡単に、無料で出来る。そういうモノこそ警戒しなくては……とはいえ、なったものは仕方がない。

真っ白な本を捨ててしまおうと閉じようとした時にある異変に気付いた。

——QRコードが無くなっている。

ページを何度捲れど何も書かれていない真っ白なページばかりだ。

先ほどのアプリが消せない事や、印刷が消えている事……本当にウイルスなのだろうか。

不可解な事ばかりが起きる現状で正しい思考など保てるわけもなく、なるようになってしまえと、真っ白のアプリを開いてみる。

『あなたは選ばれました』

その文字だけが表示されて、タップをしても電源ボタンを押しても、その表示から変わることが無くフリーズしてしまっている。

ふと不気味な男の顔が浮かんで裏から外に出て、本当にあの男がこの辺りにいないか見回す。

街灯が夜道を照らし、風の音と虫の音が鳴り響く落ち着いた綺麗な夜そのものだ。本当に非現実的な事が起きてしまっているのか、はたまた悪い夢でも見てしまっているのか。

フラフラと重い頭を手で支え店内に戻り椅子に座る。

落ち着けるためにコーヒを一口、口に含み香りを楽しんで飲み込む。

ふとカウンターへと視線を下ろすとまた本に変化があることに気づく。

催眠アプリと白い本 -本屋の店主は凛とした女子生徒を快楽に堕とす-

人を操作する。

写真を撮る。

言葉。

ページに大きく、この文だけが書かれていた。

人进行操作……？

一体なんの話なんだ。

この中から何かを選べという事か……、訳も分からず文字が現れたページとらめっこしていると、スマホにバイブ通知が届く。

表示されていた『あなたは選ばれました』の文字は変わって、『催眠アプリ』とロゴが一瞬だけ表示され、以下説明文のようなモノが表示されていた。

『恨みがある人間に報いを与えたくありませんか？ 大好きな人を振り向かせたくはありませんか？ その理想、叶えます』

その文字が消えると同時に、カメラが勝手に起動される。

そのカメラの起動で、なんとなく本に書かれた文字を理解できた気がした。

人进行操作、すなわちこのアプリで見た催眠という事だろう。

そして写真を撮る。ここで誰かの写真を撮ればそれが対象人物になるという事だ。言葉……この後分かるだろうか。

本当か嘘かも分からないこんな写真機能で人を撮るのは少し怖い。

これだけ不可解なことがあるけど、未だにこのアプリを信頼することは出来ず、顔写真を抜かれるんじゃないかと不安もあり、誰も写さないように地面に向けて一枚カシャッと撮ってみた。

……何も起きない。

そもそも撮れてさえないなさそうだ。

何度繰り返しても撮影できずしびれを切らした俺は自分自身を撮影した。

地面を撮影した時とは打って変わり、連絡アプリのチャット欄のような画面に飛ばされた。

画面の下半分にマイクのマークと、キーボードのマークの二つのボタンがあった。

キーボードのマークをタップすると文字が打てるようになり、本に書かれてあった最後の文字が頭によぎる。

試しに適当に書いてみることにした。

「コーヒーの味が紅茶になる」

送信ボタンを押すが、特に身体に変化は感じられず、疑いながらコーヒーの入っ

た紙コップを口へ運ぶ。

香りはコーヒーだが味は紅茶という違和感についつい口から出してしまった。

頭がおかしくなりそうなこの飲み物をカウンターに置き、口の周りをティッシュで拭く。

香りコーヒー、味紅茶の衝撃で忘れるところだったが、このスマホアプリで本当に催眠効果が現れていた。

このアプリは本物だ……。

とはいえ、自分に催眠を掛けても面白いが仕方がない。

対象人物を変えれないかとスマホ画面を確認してみると、左上に矢印マーク、右上にカメラマークが表示されていて、カメラマークを押してみた。

すると驚くことに、画面上部に俺が三人称で映し出された。

盗撮——。

映像からカメラの位置を特定して、そのあたりを確認してみると、カメラらしきものは無い上に、スマホの画面を触るとカメラの近さ、角度が変えられた。

……見えないカメラに写されている。

信じられないが事実そうになっている。

どれだけカメラを移動させても俺が中心に映るように動く。

このアプリはある意味信用のできるアプリかもしれない。

不可解で非現実的な事はかりが起きる。詐欺やウイルスアプリでここまでする必要もないし、まず仕組みが分からない。

再びカメラマークのボタンを押し、俺が映っている映像を閉じる。

先ほど押さなかった左上の矢印マークを押すとカメラ画面に戻った。

対象人物を変えれると分かったが、催眠を解くこともせず不安が押し寄せ、再度コーヒーを口に含めるとちゃんとコーヒーの味がした。

安堵の息を吐き、その画面のまま一度スマホをカウンターに置いた。

この催眠アプリは本物だと確信出来たが、何故俺のところにあの男は渡しに来たのだろうか。

催眠で操りたい相手など私には存在しない。

嫁もいないし、恨んでいる相手もいない、恋をしている相手もいない。

もう少し自分で遊んでみるか……？

何かヒントは無いものかと真っ白の本を捲っても捲っても、なにも書かれてない真っ白のページが続くだけだった。

これ以上悩んでも仕方がないと一度区切りをつけ、荷物をまとめて帰ることにした。

紙コップや白い本を持って、裏の方へ行き店内は消灯させる。

ゴミ箱に紙コップを捨て、本を鞆に詰めて忘れ物が無いかチャックをしていると、女子学生が忘れていた学生証が目に入った。

……中^{なか}原^{はら}、佐^さ那^なちゃんか……。

学生証の写真から、凜とした雰囲気を感じられる彼女を見ているとふと邪^{よこしま}な考^{かんが}えが頭を過^かった。

男の言葉、渡された紙、アプリ起動時の文字、理想を叶える。その言葉の中に、彼女と子どもを作ったら……犯したら……と考^{かんが}えていたことを思い出した。

写真越しに撮影しても催眠出来るのだろうか……。

彼女の写真を見ていると、彼女にハマっている妄想が頭から離れなくなり、気づいた時には催眠アプリで学生証をカシャッと撮影していた。

問題なくチャット欄へと飛ぶことが出来て、目を見開き心の中でガッツポーズを決め高鳴る胸を抑え込み、帰宅後後色々と試す事にする。

荷物を持ち裏口から店の外に出て施錠して帰ることにした。

佐那ちゃん。そう何度も名前を呼び服を剥ぎ取りトロトロに愛液を垂らしながらペニスを求める姿を想像しながら夜道を歩く。

想像だけで勃起してしまい、周りに人が居ないか気にしながらも鼻の下を伸ばしてしまふ。

他にもバックで喘がせたり、彼女に腰を振らせたり、催眠でどんなことが出来るのか楽しみで堪らない。

この催眠アプリがいつまで使えるかは分からない。

あるうちに楽しめるだけ楽しむしよう。

家に帰るとお風呂や着替えというルーティーンをすっばかして、スマホを取り出し催眠アプリを開く。

早速右上のカメラマークを押してみる。

画面にはいつもお店で見る彼女が長袖長ズボンのもこもこパジャマ姿でベッドの上に座り、スマホを眺めている姿が映し出された。

クールな印象とは打って変わり、とても可愛らしい女性らしさが映し出されている。

盗撮しているような罪悪感で後ろめたさはあれど、背徳感で満たされている満足感もあった。

グッとスマホの画面を操作してズームし顔に近づく。

小さく可愛い唇にキリッとした鋭い目つき、サラサラな黒い髪、スベスベそうな綺麗な肌に見惚れる。

まじまじと見るタイミングなど今までなく、それだけで何分も過ごせるほどだった。

性欲とは無縁そうな上品な存在感も画面越しで感じられる彼女は、こんな変態に見られていると知られたらどんな表情を見せてくれるのだろうか。

せっかく好き放題出来るモノが手元にあるというのに、ただ妄想を膨らませて仕方がない。

それでも彼女がちゃんと催眠にかかるかの確認を含め、簡単なものをチャットに打ち込むことにした。

「ジュースが飲みたくなる」

……送信ボタンを押そうとしたときに、その隣にまた違うボタンがあることに気が付いた。

そこには数字が書かれていて、一か二を選べる様だが説明は書かれていない。ふと思いつ出したかのように鞆から真っ白の本を取り出し、ページを捲る。

……意識と無意識。

その二つの単語だけが書かれているが……どういう事だろうか。

試しに一のまま送ってみることにした。

これでちゃんとジュースを飲んだら、とりあえず催眠は成功しているが……。

彼女はむくっと立ち上がって部屋を出てリビングへと向かい、コップを取り出して冷蔵庫からグレープジュースを注いだ。

そのグレープジュースを飲んでコップを洗い元の場所へと戻す。

ちゃんと催眠アプリは機能しているようだ。

『……歯磨きまたしないといけないのに……また飲みたいな……なんてだろ』

スマホのスピーカーから彼女の声が聞こえた。

このカメラ機能は音声まで聴くことが出来ることに感動してしまう。

他に何かできないかと思いつき、スマホの下の方へと視線を向ける。

画面下部は元々マイクのボタンとチャットのボタンしか無かったが真ん中にバツボタンが増えていた。

予想が正しければリセットボタンか何かだと思い、試しにそのボタンを押してみる。

『二回も飲んじゃった……糖分摂りたいときって疲れてるとき、だっけ……』

普段夜中にジュースを飲まないのか、ため息を吐きながら洗面台へ向かっていった。

彼女の言動からしても、ジュースを飲みたくなる。という催眠から解かれたのだろう。

リセットボタンという予想は正しかったらしいが、複数の催眠の一つを解くことが出来ないかを試してみたくなった。

「尿意が押し寄せる・ー」……送信。

『……歯磨きの前に行こ……』

「足が動かなくなる・ー」……送信。

『……動かない……あれ、なんで……』

トイレへと行こうとした彼女の足を止め、複数の催眠を同時に掛ける事が可能なことを実証させた。

『ッ——』

そんな彼女は家族に感づかれないようにか、そもそも無口なのか無言であがいて

見ている側からしたら物足りず、重ねて催眠を掛けることにした。

「思っていることが口に出るようになる・ー」……送信。

『ダメ、トイレ……漏れそ——あれ、声……抑えられない……漏れる……だめ……
なんで、声……』

スマホのスピーカーから、トイレを我慢しながら声を止められない状況に戸惑う可愛らしい声が止まることなく鳴り続ける。

そしてふと一と二の数字の存在を思い出し、ここまで来たらやらしい催眠で試してみることにした。

「ガニ股で足を開く・2」……送信。

動かなかった足がバツと開いて腰を落しガニ股の格好で尿意を我慢していた。

『なんで動けないの……漏れちゃう……ダメなのに……こんな年でお漏らしなんて……』

彼女はガニ股の事は一切疑問に思っていないようで、ずっとお漏らしをしてしまう事だけの葛藤を頭に浮かべ、口にしていた。

意識と無意識。一と二。彼女の意識を残したままに催眠を掛けたければ、一。彼女の意識も催眠にかけそれを普通だと思わせることの出来る、二。そういう意味らしい。

静かで凛としていたクールなあの彼女が、お喋りで尿意をふしだらにガニ股で我慢しているその姿に興奮してしまう。

そして複数催眠を掛けている中の一つを消すことがどうにか出来ないか色々試している、チャットの吹き出しを長押しすると新しい表示が出てきた。

吹き出しの横にバツマーク。画面下部中央のバツマークと意味は同じだろう。

試しに「思っていることが口に出るようになる」の隣のバツマークをタップした。

『ツ………』

スピーカーから彼女の声は聞こえなくなり、カメラで確認しても口は動いてはいなかった。

それでも尿意を我慢して足が動かないことに関して怯えているのか、目からは涙が流れていて、ガニ股を閉じることも無かった。

腰をウネウネと動かし限界が近づいてきたらしい。

試読版はここまでとなります。

この作品、パーツの転載、複製、配布を禁止します。

サークル青。 トウエスイ